

|   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|------|
| 立 | 命 | 館 | の |      |
| 民 | 主 | 主 | 義 | を    |
| 考 | え | る | 会 | 元教職員 |

- 【私の意見】 かつて立命館学園は、光り輝いていた  
—若手・入職歴の新しい教職員の皆さんへのメッセージ—  
・・・キャリアセンター 五十川 進
- 【私も一言】 花と地雷—高垣 忠一郎
- 【私も一言】 若き人への思い—廣末 良子 ●編集後記「G30」

## 【私の意見】

## かつて立命館学園は、光り輝いていた

—若手・入職歴の新しい教職員の皆さんへのメッセージ—

キャリアセンター 五十川 進

## 1. はじめに

## 【かつて立命館学園は、光り輝いていた】

立命館学園は、84 年からの第 3 次長期計画（1984～1990）以降、連続して教学「改革」に取り組んできた。第 4 次長期計画（1991～1995）、第 5 次長期計画（1996～2000）と「改革」は繋がれ続け、学園は「改革のフロントランナー」「リーディング・ユニバーシティ」と社会から称せられ、まさに持続可能な発展を続けていくかのように思われた。

「改革」に対しての社会的評価の指標のように、「大学ランキング」では 2000 年前後には多くの項目で上位を占めるようになってきた。学園にかかわる人たちは、より確かな学園アイデンティティを共有し、大いなる学園の到達点を確信したのである。

この持続し続けてきた「改革」は一部幹部のリーダーシップに依拠した所以のものでは決してなく、教



職員のたゆまぬ努力の賜物であった。全ての学園構成員が徹底して議論を繰りひろげ、それぞれが主体的に「改革」へ参加・参画してきたことが、その背景である。そしてその努力は、大手私学の中で初年度納付金が安い、いわゆる「相対的低学費政策」への社会的支持も相まって、数年間にわたって 10 万人以上、早稲田

に続いて全国第 2 位の入学志願者を集め続けた「10 万人入試」として結実してきた。かつて立命館学園は、光り輝いていたのである。

## 【光り輝く学園に何が起ったのか】

だが、おそらく 2000 年の APU 開学以降、特に 2004～2005 年以降に学園の教職員として入職された教職員の皆さん方は、当時の学園「改革」に参加・参画されておらず、その本質について実感されていない。それどころか、2005 年の一時金の 1 ヶ月カットや、トップダウンによる強引なガバナンス、極端な教職員組合敵視、理事長・総長の退任慰労金問題、超過勤務の適正な管理の欠落と結果としての差額分の廻り支給、総長選挙規定を廃止し総長選任規定を制定して理事長の意向による総長を選出する仕組み作り、不可解な人事異動、「相対的低学費政策」の放棄等々、一部トップ層による独善的、非民主的な諸施策や、最近では 2008 年の特別転籍問題とそれによる経常費補助金の 25%、15 億円以上のカットなどの事態を目の当たりにして、「一体どうなっている」「平和と民主主義が泣いている」などと思われている方も多いと思う。

私は、かつて光り輝いていた立命館学園の姿と、最近の「閉塞的な状況」、たとえば入学志願者数（受験者数）の激減などに見られる危惧せ

ざるを得ない学園の状況について、特に最近入職された教職員の方々の理解の一助になればと思い、本稿を寄稿させていただくものである。

## 2. 光り輝いていた立命館学園の改革を支えてきたもの

### (1) 学園の全構成員による「平和と民主主義」の理念の共有化とその仕組みについて

学園の「改革」に取組み、「改革」のモチベーションを高め、サステナビリティを可能にする第一の柱は、「理念・目標の共有」である。立命館学園は戦後、教学理念を「平和と民主主義」と定め、そのアイデンティティを全学園構成員、校友・父母らが誇りを持って共有しながら、学園の営みは続けられてきた。そのことは社会的にも大きく認識され、「平和と民主主義」は立命館学園の「代名詞」であり、立命館学園そのものを表す「理念」であった。まさに他大学を凌駕するモニュメントであったといっても過言ではないだろう。教学理念は、学園の改革を貫く理念として「太い背骨」であり、まさに立命館学園の「魂」であった。

2000年4月の開学にいたるまでのAPUに関する議論では、厳しい反対意見があり、その十分な総括と検証は今日においても重要な課題ではあるが、開学を決定して以降学園の教員と職員は開学への作業を協働して行っていった。そして、ここでも「平和と民主主義」の理念は継承され、その理念を軸としてAPUの「自由、平和、ヒューマニズム」のミッションが打ち出された。また、その後定められた『立命館憲章』でも「建学の精神（自由と清新）と教学理念（平和と民主主義）に基づき、・・・正義と倫理をもった地球市民として活躍できる人間の育成に努める。立命館は、この憲章の本旨を踏まえ、教育・研究機関として世界と日本の平和的・民主的・持続的発展に貢献する。」「学園運営にあたって、私立の学園であることの特性を活かし、自主、民主、公正、公開、非暴力の原則を貫き、教職員と学生の参加、校友と父母の協力・・・」と

格調高く謳われている。これを空文化させてはならない。

### (2) 教職協働とその仕組み

学園の「改革」を支えてきた2番目の柱は「教職協働」である。

たとえば、教職協働の具体的な実践は、1990年代からの理工学部拡充移転と併走してきた産学連携の取り組みがある。

この時期以前のわが国の産学連携（産学共同）は、旧帝大を中心とした国立大学の研究室や講座と大企業



との間の「産学共同」が専売特許であった。そういった中で立命館学園は理工学部（のちには文社系も）教員の研究成果を、教員はもちろん、職員も主体的に「協働」して世の中に広め、「自主、独立、公開、平和（利用）」を原則に、大手企業はもちろん有力中堅企業、中小企業、またベンチャー企業等へも紹介し、産学連携へと成就させていった。従来の産学協同に大きな一石を投じ、大いなる問題提起をなしつつ、成果としては主要国公立大学や早慶に伍して「外部資金ランキング23位」の実績をあげるに至った。なお、早稲田・慶応は外部資金の比重として「寄付」が多いのだが、立命館学園は「受託研究」の比率が高いのが特徴である。

もう一つの実践例は、APUの開設時に立命館学園らしい動きが見られる。APUの開設に当たっては、教員と職員（職制中心だが）が一丸となって開学の成功に向けての作業に取り組んだ。例えば、国際学生のリクルートのために教員と職員がチームを組み、世界各国へ赴いて有力進学高校や国立高校を訪問し、教員への説明や生徒たちを集めてAPU説明会を開催した。そのような奥の労苦を重ね世界各国の優秀な留学生を、APUという新設大学が受け入れる素地をつくり、今日のAPUの留学生集団の礎を築いてきた。

「教職協働」の実践によって、教職それぞれのミッションとモチベーションが高揚し、シン

クロし、更に新たな「改革」、「改革の持続」へと繋がって行くのであり、それを実践してきたことが2つ目の立命館学園の大きな特色でもあり「強み」でもあろう。

### (3) 学生の視点、「学生が主役」の立場に立った学園創造

学園の「改革」を支える3番目の柱は「学生の視点、『学生が主役』の立場に立った学園創造」である。学生の視点、「学生が主役」の仕組みは、立命館学園ではこれまで学園政策策定のプロセスにおいて学生が参加すること、学生が重要な学園構成員として機能することによって、大きな役割を果たしてきた。具体的には、学部においては学部五者懇談会であり、全学的には全学協議会代表者会議であり、全学協議会である。これらを通じて「教育」に関しては、学生が主体的に「学生の学びと成長」の議論に参加し、2007年全学協議会では「学習者が中心となる教育」として活発に議論に参加してきた。「教育」における学生の視点の重視は例えば授業評価においては、学生による授業アンケートを活用し教員と連携し、大学教学への課題の提起や、FDへの具体的な応用として継続的に具体化されてきている。

さらに学生の「自主的・民主的活動」も、全国の学生の自主的・民主的活動と連携しながら、力強く取り組まれてきた。一部トップ層の中には「現在の学生のレベルは、かつての激しい全学協を繰り広げてきた時代の学生のレベルとは違う」とかいて、「学生のレベルの低下」＝全学協そのものの「見直し論」があるようだが、まったくそれは的外れである。現在の学生諸君は、かつての学生がとても出来なかった、1000名以上が参加して圧倒的支持を得る学生大会を見事に成功させている。これは全国の大規模大学の学生自治会、学友会のどこもなし得ないすばらしい「自主的・民主的」活動であり、民主主義の実践であり、学園全体で誇り得ることである。学園の「改革」はこういった学生たちの

すばらしい活動とともに歩んできたのである。立命館学園と対極的に、学生が抑圧されていたり、元気が無かったりしている大学・学園は、閉塞的で活気や精気がないのは歴史的に見ても、現実を見ても自明である。

また、現実に立命館学園に全くいて学生との関わりのある教職員すべてが、それぞれ「学生の視点」「学生が主役」を念頭に業務を遂行し頑張っており、これらのことが立命館学園の大きな特徴、伝統であり、改革を推進してきた3番目の「強み」であり「特色」でもある。

### 3. 「学園改革」はフェードアウトするのだろうか？

これからの立命館学園は、「学園改革」のダイナミズムが衰弱し、光り輝きを失い、改革そのものがフェードアウトしていくのであろうか。今日の憂慮する事態を考えると、その前提

としての昨今の高等教育

や教育全般をめぐる

「情勢との切り結び」

をまずは見つめなければ

ならないと思う。



### (高等教育を取り巻く状況と「新自由主義(高等教育)政策」)

1998年の大学審議会答申、いわゆる「競争的環境のなかで個性が輝く大学」が公表されたとき、まさに「2007年問題」「大学全入時代」「定員割れ大学の続出」という脅迫的な社会状況や世論を背景に、全国の殆ど全ての大学が大いなる衝撃を受け、答申を我先にと甘受しつつ、それぞれが「個性を打ち出す」ことに躍起となってきた。

しかし、この答申はまさに政府・文部省(当時)の高等教育支援政策の「投げ出し」であり、「民営化」を推し進めた小泉改革、いわゆる「新自由主義(高等教育)政策」と歩を一にするものである。その結果どうなったか。2005年の中教審答申、いわゆる「今日の高等教育の将来像」で政府・文部科学省が「新自由主義政策」の「ダメ押し」を出すに至ったが、全国の高等

教育機関は立命館学園も含めて、「競争的環境」の中で、「個性が輝く」ことなく、ほとんど無批判に「新自由主義政策」の提言を受け入れてきたのではないだろうか。その結果、まったく「没個性」のまま全国の高等教育機関が「7つのパターンへの機能分化」や「12の提言」を鵜呑みにし、「情勢」に切り結び主体的に情勢を切り拓くのではなく、「情勢」に「飲み込ま」れ、まるで「金太郎飴」のように多くの大学が同じ顔をした「改革もどき」に安住してきたのではないだろうか。一方学園のガバナンスでは、ことさら迅速な意思決定とその『仕組み』として、私立学校法の一部「改正」を背景にしつつ「理事長（および理事）の権限強化」が制度化され、トップダウンが強化されてきたのではないだろうか。

### （21世紀COEの採択の持つ意義）

「新自由主義政策」の具体的政策として21世紀COE（卓抜した研究拠点）の採択が2002年から開始された。当初、立命館学園は学園が培ってきた研究の成果を結実させるべく、教職が協働し積極的に申請に取り組んだ。その結果、2002年度第1回目のCOEには立命館大学で3件（2003年度1件）が採択され、私学においては慶応大学（5件）、早稲田大学（5件）に続き第3位の成果であった（東京大11件、京都大10件）。この時は学園の研究者、教員が営々として培ってきた研究の成果、たとえばアート・リサーチ・センターが切り開いて来た研究や、産学連携を重視した研究が採択という形で結実したものであり、それらは学園全体の努力の結実として学園アイデンティティの醸成に大いに貢献したと思う。

しかし、それ以降2005年にスタートするグローバルCOEも含めて学園の取り組みはどうかであったろう。どちらかというと立命館学園では1998年以前は研究活動は「冷遇」されていた。



しかし21世紀COE以降は、「採択」自体が自己目的化され、そのために「COEを取れる研究者」を外部から招聘するのに汲々としてきたのではなかったか。多大な経費を投入して外部から研究者を招聘し研究条件を「整備」してきたが、果たして立命館学園の研究活動に多大な貢献をもたらした、学園の研究活動が大いに発展したのだろうか。そのことが学園のすべての構成員・校友・父母の確信となり、アイデンティティの醸成に大いに役立ったのであろうか。受験生は増えたのであろうか。そのことを、真摯に謙虚にリアルに総括しなければならないのではないのか。

### （「光り輝く学園」「学園の改革」はフェードアウトしてしまうのだろうか）

私は「学園の理念・アイデンティティの共有」「教職の協働」「学生の視点・学生の立場に立った学園創造」といった立命館学園が培ってきた「3つの特色と強み」がフェードアウトする時、学園の改革そのものもフェードアウトしてしまうだろうと思う。

逆説的に言うなら、私は「光り輝く立命館学園」はフェードアウトしない条件が多いにあると思う。その条件とは、つまり学園の一部トップ層が、この間の特に2005年以降多くの信頼関係を瓦解させてきた事実のひとつひとつについて正しく総括すること、明らかにコンプライアンスに関わる問題行為については責任の所在を明らかにし、当事者は潔く責任を取ること、そして「新自由主義政策」に迎合する（飲み込まれる）ことなく、情勢に切り結び、情勢を主体的に切り開いていくこと。その上で、「学園の理念・アイデンティティの共有」「教職の協働」「学生の視点・学生の立場に立った学園創造」を再構築していくことがその条件である。現下の「グローバル30」をめぐる議論はまさに、その試金石であろう。

### （皆さん方の主体的な参加が最大の「鍵」となる）

しかし私は、「光り輝く立命館学園」を再構築する最大の「鍵」は、皆さん方、とりわけ若手

の教職員、入職歴の新しい教職員の皆さん方が「学園改革」に主体的に参加することであると思っている。「改革のフロントランナー」として走り続けた長期計画、2000年のAPUの開学、そして学園に対する社会の支持が結実した「10万人入試」等々を「身をもって体験」していない皆さん方が、そういった営みに参加し、情勢を切り開いていくことは、「学園改革のサステナビリティ」を担保していくうえで、きわめて重要である。特に職員の場合は、業務会議あるいは部会議での積極的な発言と実践、その発言と実践が学園政策に反映されていく仕組みづくりとそのための「アクション」を起こすことが喫緊の課題であると思っている。

その際、その「アクション」を行い、「光り輝く立命館学園」「学園改革」を再構築していく母集団は、立命館教職員組合連合であると思う。かつて業務協議会において理事会と教職員組合とは学園創造を支える教職員の役割や処遇、労働条件等について真摯な協議を重ねてきた。また、立命館教職員組合は全学協議会の重要な構成員でもある。先に「学生が抑圧されていたり、元気が無かったりしている大学・学園は、閉塞

的で活気や精気がないのは歴史的に見ても、現実を見ても自明である」と記したが、これは学生に象徴的ではあるが、学生に限った訳ではない。教職員であつても同じである。

私は、多くの教職員特に若手や入職歴の新しい教職員の皆さん方が、立命館教職員組合に参加されて、再び「光り輝く立命館学園」の構築に、「学園改革」に主体的に参加していただくことが、今日の状況を切り開いていく最大の「鍵」であると思っている。

厳しい情勢の中で、「新自由主義高等教育政策」に無批判で迎合することなく、情勢に切り結び、情勢を主体的に切り開き、再び「光り輝く立命館」の構築を目指し、新たな「改革」へと、多くの教職員の皆さん方がまさに主体的に参加することを、心から期待している。

※なお、本稿はダイジェスト版であり、より詳細に論述した本論は、後日別途他の媒体に掲載しご案内させていただきますので、関心のある方はぜひご一読ください <五十川>  
(以上)



## 【私も一言】

## 花と地雷

<衣笠総合研究機構特任教授：高垣 忠一郎>

私はこの3月に立命館を定年退職しました。ひきつづき特別任用教授として仕事をさせていただいています。私の専門は臨床心理学で、30数年間、精神科のカウンセラーなどの仕事を通して、多くの悩める心と向き合ってきました。

応用人間科学研究科では主に臨床心理士を志望する院生を指導してきましたが、私が院生たちにもっとも伝えたかったことは、「平和と民主主義」を教学の理念とする立命館で育つ対人援助の専門職なのだから、その日々の仕事のなかに「平和と民主主義」を貫くことのできる専門職を目指してほしいということでした。

この季節、緑が美しいです。一言で「緑」といえど、いろんな色合いの緑があります。それぞれの色合いを發揮することで、いきいきと緑として輝いています。「咲いた、咲いた、チューリップの花が。並んだ、並んだ、赤・白・黄色、どの花みても綺麗だな。」というチューリップの花の歌があります。

赤・白・黄色と並んでいるが、赤が1番で、白が2番、黄色が3番ときれいなもの順に並んでいるわけではない。「どの花みてもきれいだな」の歌詞のとおり、赤には赤、白には白、黄色には黄色の美しさがある。その美しさに優劣をつけることはできません。それが個性というもので、赤の花の美しさは、白や

黄色の花があることによってより引き立てられるように、相互の関係はお互いを引き立て合う関係です。足を引っ張り合う関係ではありません。そういう関係を作りあげていく作法が民主主義だと私は考えています。

また戦争が武力による「脅し」によって相手を支配することであれば、平和とは少なくとも人間が「脅し」によって支配されない状態です。ところが、いまの社会には教育や子育てという領域にまで競争原理をバックにした「脅し」がまかり通っています。

端的に言えば、他人に勝ち一番をとらなければ見捨てるぞという「脅し」です。そうやって脅しをかけられて育つ子どもや若者の心に、「見捨てられる不安」や「焦り」という「地雷」が埋め込まれます。「焦り」という字は「こげる」とも読みます。焦った心は戦場のように焦げているのです。

こうした「地雷」を心に抱えた人々が生きる社会は、私の目にはまるで地雷原のように映ります。秋葉原の事件のように、いつ誰かが、誰かの「地雷」に触れて、爆発が起こるかわからない。まるで戦場のような社会です。そのような社会のなかで、臨床心理士や心理カウンセラーの需要が増えているわけです。

こうした社会のなかで、私たち心理臨床家の仕事は「地雷」を爆発させて傷つく不幸な人間が増えないようにすることを期待されます。それは「地雷」を処理する「地雷処理班」の仕事のようにも見えます。しかし、その仕事のなかに「平和を民主主義」を貫こうと思うならば、「地雷処理班」の仕事に甘んずることはできないでしょう。

競争原理をバックにした「脅し」が猛威を振るい、子どもや若者の心に地雷が埋め込まれることから彼らをガードする「セーフティネット」となる人間関係のネットワーク、共同体を創っていく仕掛け人にもならなければなりません。

私自身は、現在「登校拒否・不登校」や「ひきこもり」という問題を縁につながる問題縁の人間ネットワークのなかに身を置きながら、そのネットを繋いでいく仕事に全国を駆け回っております。私の心理臨床実践の要諦は単純です。「自分が自分であって大丈夫」と心底自分の存在を肯定し、安心することができるとき、人間の生命力は輝きだすのです。「安心立命」とはそういう意味だと私は理解しています。

## 【賛同者一覧】

朝日 稔、芦田 文夫、荒井 正治、荒川 重勝、安藤 哲生、安藤 次男、井川 定雄、石田 昌幸、石飛 幸子、五十川 進、伊藤 堅二、伊藤 武夫、伊藤 澄子、井上 純一、岩井 忠熊、梅田 四郎、岡尾 恵市、奥地 正、奥村 功、奥山 修平、小野 一郎、恩田 良昭、笈 文生、香積 学、加藤 直樹、荻屋 公明、川上 勉、菊井 禮次、栗山 崇、桑原 博昭、小檜山 政克、小村 英一、近藤 英城、坂田 典子、坂野 光俊、阪本 欣三郎、佐々木 嬉代三、佐藤 嘉一、島貫 志津江、代田 純、杉野 圀明、須田 稔、園田 充則、高内 俊一、高垣 忠一郎、高木 彰、高橋 悠、田坂 和美、田中 宏道、辻村 寛、津田 孝司、津田 正夫、堤 矩之、土居 靖範、戸木田 嘉久、友藤 信明、中川 順子、中谷 猛、中谷 義和、中村 泰行、中山 康之、永原 誠、夏原 喜弘、浪江 巖、西上 治、原木 康夫、平井 孝治、廣末 良子、藤原 莊介、二場 邦彦、松田 全功、三木 照雄、南 直樹、宮澤 正男、三好 正巳、森野 勝好、両角 正子、安本 典夫、山口 幸二、山崎 信三、山下 弘、山辺 昌彦、山本 岩夫、蓮佛 治巳、若井 勉、渡辺 峻、和田 武

賛同者合計数：112名（匿名 25名含む）

3月初旬以来、久しぶりにニュースをお届けします。この間、様々の出来事がありましたが、頁の関係で多くは記述できません。3月末の安本、安藤、土居先生他組合の退職者を送るつどい。杉本八さん、岩井、森野先生他10人ほどの退職者と出会った5月2日の憲法守る円山集会。そして、事務局に度々ご意見を寄せて戴いていた畑中和夫名誉教授が5月15日ご逝去されました。ここに追悼の意を表します。 <事務局>

元教育文化事業課長：廣末 良子

新学期を迎えたキャンパスには初々しい新入生の姿が初夏の光とともに眩しく、新鮮な風を送っています。また各職場には研修で配置された新任職員の、緊張と不安とやる気の見え隠れする新鮮な姿をのぞむことのできる季節です。

退職後の今も、私の手元に「信濃デッサン館ニュース」（無言館）が年4回送付され、読むのを楽しみにしています。内容はニュースですから館をめぐる企画、感想、雑感等が掲載されていますが、中でも若いスタッフの方々が絵画に関わるテーマを自ら設定し、原稿を起こしている個所に心動かされます。苦勞しながら奮闘している姿が目にかびます。そして明らかに成長している様子がかえりるのは、傍から見ている私にも嬉しいものです。来館日誌の欄では来館者の多い日の忙しさに喜び、閑古鳥の鳴くような日には、静寂さの中で深く作品に触れ、それに関わる人々に思いを馳せる「デッサン館・無言館」のスタッフの思いが表現されています。私にとって署名でしか知らない人なのに、人柄までも垣間見えるのはなかなかの文章力です。

「立命館大学国際平和ミュージアム」が長野県上田市にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」と姉妹館として関わるきっかけとなったのは、ある夏の研修会からでした。「モノを見せる」博物館のスタッフは、自分自身の目で「モノ」を確かめることが大切として、毎年夏の研修会は全国の関連する博物館・施設等を見学することにしていました。その年、スタッフから強力に推薦されたのが前年度(1997年5月)に開設された「無言館」でした。平和ミュージアムの課内にある研修委員会から「安曇野ちひろ美術館～松代大本営遺跡～信濃デッサン館・無言館」を観覧したいと提案され、その準備が始まりました。費用はあらかじめ各自が積立貯金し、研修費を合算して参加者数で均等割りにしていました。それは契約・アルバイトさんも一緒に参加するのが恒例で、「一緒に仕事をしているのだから、見聞をともにし学びを共有したい」が、現場スタッフの思いだったからです。

「無言館」を見学した後は、ただもう「立命館大学の学生たちに見せたい」思いにかられて、後日ミュージアム館長安齋先生とともに「無言館」館主、窪島誠一郎氏のもとを訪れて折衝を行い、巡回展・無言館コーナー設置・北海道慶祥高等学校PTAによる展覧会を経て、姉妹館として現在にいたっています。

振り返ってみると、双方のスタッフは自分の仕事に誇りをもって取り組んでいました。より多くの人々に足を運んで「モノ（絵画・遺品・写真・資料）」を観てほしい思いがありました。人との繋がりを大切にし、協力しあう資質を育む。そして「平和と戦争」の展示表現は、取りも直さず「生と死」がテーマであり、絵画のみならず芸術・文化・社会と、多岐にわたる感性を豊かにする。こうした点を共通に大事にしてきました。

しかし、この共通点はミュージアム関係者にとどまることではありません。先日来、教職員組合書記局の書架を整理する中で青年部機関誌「激流」を手に入れました。1970年代～1980年代の「激流」の寄稿には夢と希望が語られています。「仕事に確信をもち、未来を見据えた具体的な夢がある」と語りつくせぬ思いが随所にほとぼしり、読む者を元気にする力があります。

あの当時の若者は、いま学園の真ただ中で中堅幹部として仕事をしています。かつて組合活動を通して培った——青年らしい正義感と、仕事への沸き立つ情熱、仲間との連帯・五感を研ぎ澄ます感性の豊かさ——を、今の青年にしっかり継承し、ともに誇れる学園を目指してほしいと切に思う今日この頃です。

## 【編集後記】 「グローバル30」をめぐる組合の問題指摘と本間副総長のメッセージ

「ユニタス」(2009年3-4月号)に本間副総長(新戦略、国際担当)が「教育の国際化を目指して」というメッセージを載せています。

本間氏はこの短文の中で、グローバル30の特徴を端的に指摘し、立命館が申請にあたってなにをすべきかのポイントを述べています。それは、「APUと違い、規模がはるかに大きく、長い伝統を誇る立命館大学を『国際化』していくには、教職員一人ひとりが留学生を受け入れることの教育的意義と社会的意味を理解し、大学の持てる資源を重点的に振り向けていくという合意が全学的になされることが必要です。・・・中略・・・教員がこれまで以上に多くの時間を学生の指導に割くといった、抜本的な教育改革が求められるからです。」と、さらに「各学部・研究科でそれぞれの教学実態に即した留学生受け入れの拡大についての議論をお願いします・・・」です。

ところが、川口総長はじめ「常務会」や総合企画部長らは、ゆにおんNo. 6およびNo. 8で組合が問題指摘したことに対し、極端なアレルギー反応を示したということです。

例えば、組合は重要な政策について説明も聞かずに、一方的に組合がビラにした、〇〇の教授会と心中するつもりか!とか、特定の考えの人達だけが反対しているのだ、と批判したそうです。それだけ重要な政策だと位置づけていたのなら、組合を信頼してなぜきちんと説明会を開かなかったのでしょうか?

それだけでなく、各学部教授会の討議結果の学部長報告に対しても、グローバル30と直接結びつかないような発言(例えば、ロースクール設置経費でどれだけ恩義を感じているのか、という趣旨の発言、職員職場の討議は部会議まで、業務会議は常任理事会が結論を出した後にせよ、という指示等々。)反省してきたはずの「トップダウン・ガバナンス」の態度そのものがまた繰り返されていると聞きます。総長・理事長の先の「呼びかけ」(2008,9,10)は何だったのでしょうか?

もともと、本間氏も本学に就任当初は、業務協議会などを優れた制度だと云っていたはずなのに、雑誌『世界』6月号でも引用されている「Wedge Report」(2008年7月号)では「元文部官僚」らしく、「大学改革は理事長のリーダーシップと、それを支える職員力がカギ。教授会などの抵抗勢力は強く、改革というには程遠い状態の大学がほとんどだ」という趣旨を語っています。「教授会を抵抗勢力」と言ったり、職員をもの言わぬ官僚機構と位置付けるのは、「教職協働」という学園創造運動の真の理解とは程遠いのですが。

組合や多数の教授会が全学討議の重要性や新中期計画や学費・財政政策との整合性、政府・文科省の競争的補助金政策への批判的検討を呼びかけたことは理にかなったことではないのでしょうか。それを「特定の学部や団体の考えに基づいて反対しているのだ」とする意見は、本間氏の「ユニタス」のメッセージをも否定することにならないのでしょうか。

昨年、大学時報(7月号)で常任理事会のメンバーである谷口吉弘本学生命科学部長は、「『留学生三十万人計画』と私立大学の役割」で、留学生問題の歴史的背景を含む現状と課題をすでに指摘していました。

常務会は世界的・全国的視野で高等教育情勢と切り結ぶことをおろそかにして、一地方の「市立岐阜商業高校」にエネルギーを注ぎ込んでいました。常任理事会自身が08春闘回答基本方針で「グローバル化と留学生30万人計画」を「日本の大学の国際化を根本から問うこと」になると予想しながら、全学論議に間に合わせる準備が出来ていなかったことを反省せず、「乗り遅れまい」とする常務会の焦りと教職員一人ひとりを大事にしない「トップダウン・ガバナンス」の姿勢が、常任理事会決定の「付帯意見」となったのではないのでしょうか? (M&H)

事務局連絡先：〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 立命館大学教職員組合 気付

「立命館の民主主義を考える会(元教職員)」

TEL:075-465-8200(宮澤気付) FAX:075-465-8201

メールアドレス [rits.democracy@gmail.com](mailto:rits.democracy@gmail.com)

ホームページアドレス <http://rits-democracy.blogspot.com/>